

# 十一月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

都電の音

影山 一男 千葉

エックス  
Xと名称変へしツイッター夏の闇夜に謎はふかまる

青山墓地防空壕に一夜さを父は耐へけむ傍への死者と

空襲のこと二三回聞きしこと思ひ都電の音想ひをり

戦争のちに生まれしさいはひをしみじみと思ふ盆の夜覚めて

東京大空襲の惨思へよと隅田川上空火花とどろく

やぶやぶ

小山 富紀子 京都

水煙が火焰と燃ゆる昼下がり蛇口ひねれば熱き水出る

素麺をざぶざぶすればふと恋し昔わが家に涌きし井戸水

「じゃあ又ね」「又ね」と交はし別れゆく又と別れてゆけるしあはせ

乱世のもののお別れに交はしけり「命もあらば」と直実、宗清（直実、宗清）

戦場で今も兵らは交はすのか「生きていたなら又会おうな」と

冷やし茄子

水上 比呂美 東京

吉祥寺の改札を出て駅を出て右へ惹かれて居酒屋（千尋）

生ビール大、大、小とウーロン茶で乾杯をせり四年ぶりだね

看板に「田舎料理」とある（千尋）翡翠のごとき冷やし茄子なり

蜘蛛族の姉妹のやうに友だちに編みもの教ふ肩をすほめて

カーテンをせんぶ洗つて泳がせて夜とのさかひにカーテン垂らす

武器商人

鈴木 竹志 愛知

キーウより流れてきたる報ひとつアゾフ連隊復活の報

敗走せしアゾフ連隊復活の報ありたれど戦況厳し

侵攻の記事減りゆけど戦争の終はるきざしはほととなくて

一年と半年が過ぎそのニュースさらに減りゆくロシアの侵攻

戦争の背後にいつもうごめける武器商人の素顔はいかに

☆

☆



水島晴子 兵庫

奥村晃 作\* 東京

見馴れたるカールのかづら脱ぎ捨てて手負ひのひとは鏡に見入る  
雲が好き雲の変化をよく描いた 媼つぶやく夏ぞらを負ひ  
杖つきて屋上ゆけば片すみにとつ朝顔あをいとけなし

天使降りあそびしものか明け方の病舎のトイレ小き跡見ゆ  
とりわけて気遣ひやさし名の末尾「姫」の文字見ゆる看護師Tさん

武田弘之 神奈川

駅前田蛙ら鳴く村なりき今は高層ビルが並み立つ

明け方に鳴る梵鐘をうるさしといふ人多き街になり果つ

歌作る暇があるなら身辺の整理をせよと老妻は言ふ

老妻の呼ぶ鋭き声で駄目になるでき上がらんとしてゐし歌が  
みづからの命絶つすべなど知らぬ山鳩のごと生きてゆきたし

高野公彦 千葉

半夏生の白葉にはそき雨ふれば良人亡くせし人の思ほゆ

髭と鬚と髻の字見れば浮かびくる明治のころの作家、軍人

生年もまた没年も知られざる例へば清女、紫女ら尊し

コロナ後も日々測りをりはるけき日母より享けし私の体温

越の酒(吟の雫)を飲む夕べ三日月は金の雫のごとし

今日ひと日暮らし立てるが精一杯われら八十代の夫婦は  
朝昼夕三食作り食べている食習慣の今に変わらぬ  
電力は足りているのか猛暑日の昼夜皆がクーラー使い

諸経費の高騰ゆえにあちこちで花火大会あきらめしとぞ  
百歳で歌詠み日々を健やかに暮らすとぞ従姉のユキ姉さまは

森重香代子 山口

家門の草抜きをりて息果てし兄よいまは何を思ひし

受け継ぎし社業をながく守り来てその生涯を終りたる兄

唄ふ趣味ありたるといふその声を聴くこともなく兄を逝かせつ

父に似て整ひし面ひとつそりと棺の底に今朝は眠れり

家継ぎし兄ありてつね安らかに過ごし来たりきはらからわれら

日影康子 富山

本堂の高き大屋根に夏陽さしきららに反射す午後わが窓

冷房の部屋のドアあけ出る廊下熱気がむわつとわが顔を押し

猛暑日に僧衣を着けて出かけゆく住職の息子よ恙なくあれ

黄昏のわが部屋覗きて息子言ふ「アイスクリーム買って来たよ」と

夫の和顔つねに身辺に在ることを当然としてわが幸ありしか

桑原正紀 東京

電線を伝ひて熱帯夜の空を行くハクビシン天心に月  
夜の空を人目はばかりそろそろと行くハクビシンくきやかに見ゆ  
マンシヨンの床下に棲むハクビシン話題となりて理事会長し  
歴史的凶事のありし誕生日ただ黙禱をせしのみにも過ぐ  
九ちやんの「明日があるさ」いくたびも去来せり八月十二日

狩野一男 東京

宮柘二、佐藤佐太郎の歌読めば老いを力とする意味へゆく  
はちぐわつや危険な暑さをさまらずあね八十五、われ七十二  
大変な夏を過した我がために仁平勝の『デルボーの人』  
鷹羽狩行、仁平勝が先輩といふはうれしも俳人にして  
(老い我は密かに学ぶ。山田恵里、有川知津子、斎藤美衣を)

宮里信輝 神奈川

チェンソー・刈払機は免許皆伝 公的機関の講習受けて  
厚木市の「七沢森林公園」は老若男女の「散歩」場所なり  
その「山歩」邪魔する木々や荒草らを処分するのが当会の仕事  
散歩道せばめて繁る荒草は「刈払機」の回転刃にて  
林道をせばめて繁る杉らにはチェンソーのチェーンが出番

小島ゆかり 東京

雷鳴ののちみづいろの夜空あり死をおそれつつ死をねがふ母  
会ふときも別れるときも手を振つてわたしは風の谿のやうだな  
六十年前のなつぞら窓に見え小一の孫が宿題をする  
きのふまで孫のすみれがはらまいた声まで吸つてしまふ掃除機  
遠くなり近くなる蟬声のなか なにことか過ぎ夏逝かんとす

木畑紀子 京都

草の芒粟のあを穂がつんと尖りて険し夏野のいのち  
音量をしばりつけおくテレビよりこの世の汚濁の川音きこゆ  
分別のゴミのさまざま週六日まいにちゴミは捨てねばならず  
一升瓶五本のそばにドリンク剤三十個の瓶捨てて羞し  
核のゴミ宇宙のゴミは捨てどころなしとぞ常に耳朶に残れる

島田暉 神奈川

境内の大樟の樹を見上ぐれば神の呼べるや新緑の風  
薔薇園にひとりしづかに目つむれば薔薇の薫りはオーケストラなり  
少女らの自転車飛ばして過ぎしあと白木蓮の香り流れる  
夕立に打たせて傘の中に立つ少女らの声虹とかがやく  
日本の空は戦争なきゆゑに飛びゆけボール銀河の果てまで

大松達知\* 東京

〈新しい先生〉としてこの春のしらがあたまをひとまず垂れる  
ニューカンに行つてたと言う この人はきのういちに休業にして  
つぎつぎとショート動画を見ておりぬ生きてる人は筋肉うごく  
葉にも〈切れ味〉のよしあしがある北に帰れる鳥のようにも  
しろくまのぬいぐるみじつと抱いている体内時計直すみたいに

田宮朋子 新潟

朝涼といふには暑き道端に露草は青き眼をひらく  
戦にて釈迦国ほろびたるのちの釈尊を説く盆の法要  
俊太郎いはく「宇宙は鼻の先」銀河のすみで海風を吸ふ  
〈空洞果〉のラベル貼られて並びをり大きな頭のやうな西瓜は  
青田より吹きくる風の指先が蓮の丸葉の裏を見せたり

津 金 規 雄 神奈川

シューマンが身を投じける大河ライン見し二十代の日のよみがへる  
ロベルトがクララに贈りし花々の蜜の凝りしその楽を聴く  
シヨパンよりもシューマンへ向くわが愛を受け取めくれし人も遙けし  
「ポツペアの戴冠」を聴く不倫さへも至高の愛とせしものがたり  
ポツペアの胸にふたつの林檎ありネロは惑ひきその蜜と香に  
清 水 正 子 神奈川

ひぐらしを聞かなくなりしわが谷戸に星空指数2の夜を待つ  
ねぢ花のらせん階段のほりゆく妖精もゐむ月下の芝生  
薄雲に透く月のごとトナカイの眼が青くなる極夜は魔界  
舞踏会の手帖になれどオーロラのダンス美しき極夜おもはむ  
青き眼を閉ちてトナカイ眠りぬむ詩の極北を人は目指せり

小 嶋 一 郎 佐 賀

退院後外出叶ふは庭までとヒマワリ仰ぐあさ、ひる、ゆふべ  
昨夜より詰め込みをりしカマキリを許せと放つ今朝の一善  
持続的撒水となるこの雨にひと日を打たすエビネの小鉢  
窓枠に止まりて逡巡するさまを尺取虫は見す籠り居われに  
この二十日体重五十一キロのままに過ごすを療養といふ



後 藤 美 子 北海道

ペルー産「春のみかん」といふを売る剥けば乾きて固きその皮  
青みのこる早生の蜜柑の一袋かごに入れぬやさしき思ひになりて  
ほつとして皮やはらかき蜜柑剥く唐津産ハウスもの皮薄く小粒  
ハウスみかん売らるる季節高けれど皮うすく甘しさをりなつかし  
台風の進路を告ぐる予報忙し（線状降水帯）といふ語にも慣る  
福 士 り か 青 森

田舎館村の役場は城づくり殿様気分  
で田んぼ見下ろす  
棟方志功「門世の柵」とりどりの古代米にて田んぼに描かる  
色白く鼻筋通るおちよほ口志功美人は菩薩の容

巡礼が寺に収める柵のごと思ひを込めて志功描きけり  
生誕百二十年なるこの年に閉館決まる志功記念館

藤 野 早 苗 福 岡

わたしまだ泳げるかしら 浦育ち足の萎えたる母が言ひたり  
可愛さがせつなくなるよおかあさん九十一の笑み タブラ・ラサ  
親切なヘルパーさんとわたくしをいつか呼ぶのでせうねかあさん  
たぶんもうちやうど迎への頃ほひと考に託さん母のゆくすゑ  
とりかへしつかないことはとりかへす必要なしと己に言へり

風 間 博 夫 千 葉

相手といふ一人は要らずひとりのみにて楽しめるボウリングとは  
「タヒね」とはなんぢやい朝日新聞の「素粒子」で知る「死ね」の隠語と  
ゴミ袋かかへて走り回収車へと投げ入れてすぐまた走る  
途中階で長く停車のエレベーター空籠となり上り来りぬ  
一階まで降りゆく人とわれは見て伴に降りれば二階であつた

田中愛子 埼玉

大野英子 福岡

巻頭は広島、長崎出身の人の歌なり葉月「うた新聞」

里の家にペンケース残りそれぞれ鉛筆小さき消しゴムのあり  
ぢいちゃんの軽トラ雨に濡れてをり孫の四駆が車庫に納まり

七人のなまへも覚えられぬまま「刑事7人」最終回なり

「逃げ切つて」胸の裡にてつぶやけりアラン・ドロンの(ヘトム)美しく

橘 芳 園 新潟

不飲酒戒保てぬ僧のむごき死を子らにさらして父は逝きたり  
死の縁は僧の父にも無量にて食道静脈瘤破裂して果つ

僧もかくむごく逝くかと父の死をさまじめなりし姉は言ひにき

父の酒とがめる母に酒ぐらる飲ましてやれと祖母は言ひるき

祖父の分われの分まで飲み干して六十四歳父は逝きたり

原賀 環 子 東京

『デルボーの人』の句集の表紙絵の裸女をおく卓つねに鮮し

満月の夜をあるきてコンビニでカラーコピーの釦押しけり

汚したくなきデルボーの表紙はもコピーのカバーで句集をおほふ

「間をあけて立つデルボーの人涼し」 ああ麗はしいコロナ禍の距離

いまを生きて疫病もまじる親しさよ仁平勝の二百六十句

水 上 美 季 神奈川

わが腹にしまつておいた宝ものが両手ひろげて布団に寝てをり  
ほんたうにいわざさちひろの絵のやうだほつべたぶんと眠る赤児は

永田紅の「いま二センチ」を乳のみ子の眠る間に読む夏のひるなか

夢ではないこと確かむるやうに子を抱つこ紐に乗せ外へ出でたり

小半日ながめてなめて振りまはし右のこぶしを研究する子

なすすべもなきごとと海鵜は眺めをり木つ端流れて泥濁る川

雷鳴とともに涼しい風が吹く雨はひとときは強くなりつつ

止むことのなき雨と風、いなづまを飽かず見てをり眠れぬ夜を

雷鳴の後引くおとを聞いてをりやがてあまおとだけが残れど

始まつたばかりと思つた夏は盆、カーヌンとランがさらつていつた

松 尾 祥 子 東京

三宮駅周辺を歩きあるき明石焼き食む酷暑の真昼

幼稚園のかの日を語る友とわれ有馬温泉の湯に浸かりつつ

知り合ひて六十年の友とゆく平安神宮風鈴が鳴る

おみくじを引くわれ引かぬ友にして中吉一枚結んで帰る

秀吉が食べた それなら食べませう茹で卵付き朝がゆセツト

鈴木 千登世 山口

ぬらりと輝る虹色の尾を引ききて炎昼の王トカゲ胸張る

二時間で洗濯物の乾く日の独立峰たりキユムロニンバス

サンガラスはづして見つむるビルの群れ(沸騰化)とふ徳忍び寄る

温暖の次は高温、灼熱の順と思ふに沸騰が来ぬ

灼熱でなく沸騰を選びたる訳者あること Global boiling

小 島 な お \* 東京

葉の影が薄く視界を遮つて見えなくなれば振る手を下ろす  
真暗闇のガードレールは(凭れても大丈夫)緑色に光るよ

紙袋に葡萄を提げて会いに行く渋滞の赤いライトのように

紙コップふやけて指の五本から流れだす大河の夜、だった

水槽を部屋と呼ぶひと 亀の世話してくれたひとと君を呼ぶひと

小田部 雅子 静岡

斉藤 梢 宮城

無機質のひかりとなりてアキアカネ台風一過の田の上を飛ぶ  
うすべにの子豚のぬくみ毛の強さよみがへりくる、堆肥が匂ふ  
生活改善キッチンカーが廻りきてマヨネーズなるもの初めて見たり  
夏がくれば地域の子らをバスに乗せ海に連れゆきし母たちの輪  
どの家も田舎の村は貧しくてなんとはなしの平等ありき

夏痩せの岩木山見て歩きをり父の施設へ母の施設へ  
八月の日々は暗いか明るいか 別々の施設で暮らす父母  
ペランダのミニトマトにも朝が来て小さな命それぞれ眩し  
見開きで甲子園紙面作りあるスポーツデスクの夫に夏来る  
四年ぶりに甲子園の土持ち帰る健闘あとの手のひら手のひら

詩歌句レッスン ● 小島ゆかり

コロナ禍に祈りの一首

《新聞転載》

もうコロナ時代と呼んでよいほどに、新型コロナウイルスの感染に終わりが見えません。

2019年の年末に、中国武漢での感染がニュースになったころにはまだ他国の話であったのに、年明けには世界中に拡大し、またたくまに日本もたいへんな状況になりました。

わたしたちの日常にも大きな変化が訪れ、非日常だったことがしだいに日常になる、そんな怖ろしさを実感しました。

パンデミック、アラート、ソーシャル・ディスタンス、ステイホーム、リモート、オンラインなど、耳鳴れないカタカナ語の

みならず、これまで使っていた日本語もまた、これまでとは少し異なるニュアンスで用いられるようになりました。「自粛」は、放送自粛などではなく外出自粛のこと。時短は労働時間短縮の意味から営業時間短縮の意味へと軸が移りました。

日常の変化は、言葉や生活感覚や季節の情感にまで、影響を及ぼしているとさえ思われてなりません。

そんな危機感なのか、「二〇二〇年コロナ禍歌集」（現代歌人協会編）が刊行されました。

〈わが父が戦死したりし武漢いま炎上し  
おり冬の最中を〉

西勝洋一

「武漢」に新しい記憶が刻まれた、凄みのある一首です。

〈感染者日々ふえてゆくはつはるを蠟梅  
咲けり 臭覚正常〉 草田照子

〈目は口ほどに物は言わないマスクした  
われらしづかに曖昧にをり〉 水上芙季

いずれも、コロナ禍が日常であることを具体的に表現して、説得力があります。

〈オンライン会議のために上半身着替えて  
わたしケンタウロスのように〉 川島結佳子

〈売れてゆくマスクの紐につながって義  
兄の手芸店は春寒〉 辻聡之

労働の現場にも、おかしな、そして虚しい現実があらわです。

〈ひとあまた病む日々なれど生命居住可能  
惑星なほ優しきひびき〉 佐藤弓生

祈りのような一首です。